

〔調査報告〕

## パンデミック下の学生生活に関する調査 —お茶の水女子大学の学生の意識と行動

脇田 彩

### 要 旨

本報告は、2021年10月にお茶の水女子大学の学部生を対象に行われた「パンデミック下の学生の意識と行動調査2021」の概要を示し、調査によって明らかになったパンデミックの学生に対する影響の一部を報告する。また、調査に参加した「生活社会調査実習」受講生が報告書に掲載した研究成果のテーマを紹介する。

調査結果から、COVID-19に関する意識と行動については、学生の間のはらつきが大きく見られること、居住形態などと関連していることが分かった。オンライン授業の満足度は高いものの、コミュニケーションや授業外学習の量、学生の健康が課題となっていることが示唆された。学生のインターネット利用は授業外でも増加しており、政治に関するニュースへの接触も増えている。家族・友人とのコミュニケーションはパンデミックによって大きく変化し、家族と離れて暮らす学生たちは家族との関係を重視するようになった。食生活に対しても、パンデミックの影響が観察された。様々な項目への満足度はパンデミック前より低下する傾向にあるが、項目によって異なり、また学生間でパンデミックの影響が二極化している可能性も考えられる。

本稿は、2021年10月にお茶の水女子大学の学部生を対象に行われた「パンデミック下の学生の意識と行動調査2021」について、その概要を示し（1節）、パンデミックの学生に対する影響に関する調査結果を報告する（2節）。また、調査に参加した「生活社会調査実習」受講生が報告書に掲載した研究成果のテーマを紹介する（3節）。本調査の結果は、「パンデミック2年目」となった2021年度に、学生の意識と行動にどのような特徴が見られたのか、学生生活にどのような課題があり、学生たちはそれらの課題にどう対応してきたのか、といったことを検討するための一助になると考える。

### 1. 調査の概要

#### 1.1 調査の実施

「パンデミック下の学生の意識と行動調査2021」は、COVID-19（新型コロナウイルス）によるパンデミック下における学生の意識と行動を解明することを目的に、2021年10月14日から11月1日まで、インターネットを用いた調査票調査によって実施された。調査主体は、2021年度お茶の水女子大学生活科学部人間生活学科生活社会科学講座の後期科目「生活社会調査実習」の受講生、ティーチング・アシスタントを務めた須永真帆、教員の脇田彩である。調査対象はお茶の水女子大学の学部生であり、

回答者数は201である。学部生数が約2,000人であることを考えると、母集団のうち約10%から回答を得ている。

本調査は調査項目として、パンデミック前後の学生の意識と行動の変化や、パンデミックに関連する意識と行動を尋ねる項目を多く含んでいる。たとえば、居住形態、食生活、家族・友人との関係、生活時間、インターネット利用、ストレス、満足度などについて、パンデミック前後の変化を捉えるための質問項目がある。また、COVID-19に関する意識とその変化、COVID-19に関する情報源、COVID-19に対する関心や不安、オンライン授業に関する意識、感染リスクに関わる行動や意識などを尋ねている。その他、フェイスシート項目、社会関係、経済状況、学生生活、精神的健康、社会意識、様々な行動を尋ねる項目が含まれている。

調査票はGoogle社の無料サービスであるGoogleフォームによって作成し、調査対象者に回答用のURLを知らせて調査への協力を依頼した。調査協力依頼は、3つの方法によって行った。第一に、受講生が履修している科目等の担当教員に依頼し、許可が得られた科目について、授業内で調査協力依頼を行ってもらった。第二に、一部の学生を対象とする学内のメーリングリストにより、調査協力依頼を行った。第三に、学内者のみが閲覧できる複数のSNSにおいて、調査協力依頼を投稿した。

## 1.2 調査データの特徴と問題点

本調査の回答者はお茶の水女子大学の学部生の一部であり（ $N = 201$ ）、母集団である同大学の学部生から確率抽出されてないため、代表性

のあるデータは得られていない。データを見ると、学部・学年に大きな偏りがあることが見て取れる。

表1は、学年・学部別回答者数と、全体（201人）に占める割合である。全体の53.2%にあたる107人が1年生である。また、生活科学部の回答者が89人（44.3%）と多く、とくに理学部の2年生以上からの回答が極端に少ないことが分かる。こうした学年・学部の偏りは、当然その他の質問項目への回答の偏りにもつながっていると考えなければならず、本調査データの問題点である。その他、本調査回答者はお茶の水女子大学の学部生全体よりもやや実家住まいの割合が大きいと考えられる（脇田編 2022 : 3）。

学年の偏りは、授業での調査協力依頼によって調査に回答した調査対象者が多かったためと考えられる。多数の調査対象者を一度に集められる可能性がある大規模授業は、1年生が履修者の中心であるものが多い。調査を実施した受講生の多くは生活科学部の学生であったため、3、4年生への授業を通じた調査協力依頼は、生活科学部の限られた少人数授業において行われることになり、学部の偏りが生じたと考えられる。加えて、メーリングリストによる調査協力依頼もほぼ生活科学部の学生を対象とするものであり、学部の偏りがさらに大きくなったと考えられる。

回答者数の少なさ、とりわけ学年・学部の偏りから推測される学内のSNSを通じた回答者の少なさは、調査票が長く、かつスマートフォンでの回答を推奨しなかったためと考えられる。60問近い質問項目があり、これは前年度に行われた同様の調査と同程度であるが、回答者の負担は大変大きかったと言わざるを得ない。

表1 調査対象者の学年と学部

	文教育学部		理学部		生活科学部		合計	
1年生	32	15.9%	34	16.9%	41	20.4%	107	53.2%
2年生	14	7.0%	4	2.0%	26	12.9%	44	21.9%
3年生	17	8.5%	5	2.5%	12	6.0%	34	16.9%
4年生	5	2.5%	1	0.5%	10	5.0%	16	8.0%
合計	68	33.8%	44	21.9%	89	44.3%	201	100.0%

また、質問項目によってはスマートフォンでは回答フォームが見づらいという指摘を受けており、このことが回答意欲を削いだのではないかと考えられる。学内者を対象としたインターネット調査の場合、授業時に紙の調査票を用いて集合調査を行うという、パンデミック前には一般的であった大学内での調査票調査とはまた異なる工夫が必要である。スマートフォンでの回答を前提として、回答者の負担軽減を考える必要があるだろう。この点を改善できれば、大学内のメーリングリストやSNSの活用により、調査協力依頼自体はより多くの学生に対して行うことができるため、インターネット調査は従来より多くの学生に協力してもらえらる可能性を持つ調査法であると考えられる。

以下では、こうしたデータの特徴と問題点を認識した上で、調査結果を確認したい。

## 2. 調査結果

ここでは、調査結果のうち、パンデミックの影

響に関連する点を中心に簡潔に紹介する。単純集計表は報告書を参照されたい（脇田編 2022）。

### 2.1 COVID-19 に関する意識と行動

表2には、COVID-19への関心を示した。どの項目についても概して関心が高いが、調査時点（2021年10月）においては、とりわけ日々の感染者数や、ワクチンの有効性への関心が高かったことが分かる。この時期は、いわゆるデルタ株が流行する前であり、COVID-19の感染者数は比較的少なく抑えられていた時期である。また、1, 2回目のワクチン接種が行き渡っており、80%以上の回答者が2回のワクチン接種を経験していた。そのため、ワクチン接種の進捗状況そのものよりも、その有効性や副反応、そして日々の感染状況への関心が高かったと考えられる。

表2に示したCOVID-19への関心を0-4点の得点に変換し、学年と居住形態による違いを調べた結果が表3である。学年・居住形態による差がそこまで大きいわけではないが、概ねどの

表2 COVID-19への関心 (N = 201)

	関心がある	少し関心がある	どちらともいえない	あまり関心がない	関心がない	計
日々のCOVID-19感染者数の状況	33.3%	37.8%	7.0%	14.4%	7.5%	100.0%
政府によるCOVID-19対策の動向	27.4%	44.3%	10.4%	11.9%	6.0%	100.0%
COVID-19のワクチン接種の進捗状況	15.9%	40.3%	15.9%	19.9%	8.0%	100.0%
COVID-19のワクチンの有効性	35.3%	41.3%	13.4%	6.0%	4.0%	100.0%
COVID-19のワクチンの副反応	25.4%	40.3%	16.4%	10.9%	7.0%	100.0%

表3 学年・居住形態別 COVID-19への関心得点 (0-4点)

	1, 2年生		3, 4年生	
	実家 (N = 109)	それ以外 (N = 42)	実家 (N = 32)	それ以外 (N = 18)
日々のCOVID-19感染者数の状況	2.91	2.69	2.59	2.22
政府によるCOVID-19対策の動向	2.83	2.57	2.78	2.61
COVID-19のワクチン接種の進捗状況	2.54	2.14	2.31	1.89
COVID-19のワクチンの有効性	3.04	2.90	3.09	2.61
COVID-19のワクチンの副反応	2.75	2.69	2.66	2.06

項目についても実家に住む1, 2年生において、COVID-19への関心が少し高い傾向が見られる。1, 2年生は、入学時からCOVID-19の影響を受けて学生生活を送っている。そうした低学年の、かつ実家住の学生の間でやや関心が高いと思われる。

表4は、COVID-19に関する情報源である。複数選択による回答を見て見ると、多くの学生が情報源としているのは、テレビ（民放、NHK）、SNS、家族・友人・同僚、そしてLINE NEWSなどのニュースサイトである。最も高い頻度で利用する情報源としては、テレビを挙げた人が半数以上を占める結果となり、SNS（18.9%）がそれに続く。COVID-19によるパンデミックをめぐる情報は、インターネット上の情報の重要性や問題点が指摘されているが、学生の間でもニュースサイトやSNSが学生の重要な情報源となっていることが分かる。ただし、最も利用される情報源としては、やはりテレビが多く挙げられている。回答者が若年であるにもかかわらず、

NHKや新聞といった「権威ある」メディアが情報源の1つとして比較的多く挙げられることは、お茶の水女子大学の学生の特徴であると考えられる。

表5は、1回目の緊急事態宣言が出されていた2020年4月5日と比較した、COVID-19に関する意識の変化である。前述の通り、調査が行われた2021年10月は、比較的感染者数が落ち着いていた時期である。にもかかわらず、1回目の緊急事態宣言が出され、人々の外出が著しく減少し、大学の授業もほぼ全面オンラインで行われていた2020年4月5日と比較して、不安が強まったという人もいる。この質問は意識の変化を尋ねたものであり、2021年10月時点の意識を尋ねたものではないが、パンデミック発生後約1年8ヶ月を経た調査時点では、COVID-19に感染することへの不安や、重症化する可能性への認識には、回答者間でばらつきが大きいことが窺える。他方で、パンデミック収束への期待は強まったという人が、外出への後ろめた

表4 COVID-19に関する情報源（N = 201）

	情報源（複数選択）	最も頻度が高い情報源		情報源（複数選択）	最も頻度が高い情報源
政府サイト等	23.9%	4.0%	その他のニュースサイト	6.0%	0.5%
NHK	53.7%	21.9%	SNS	57.2%	18.9%
民間放送	67.7%	30.3%	家族・友人・同僚	45.8%	5.0%
新聞	27.9%	4.0%	ラジオ	2.0%	1.0%
Yahoo! ニュース	20.9%	3.0%	その他	0.5%	0.0%
LINE NEWS	39.8%	11.4%			

表5 COVID-19に関する2020年4-5月からの意識の変化（N = 201）

	強まった	少し強まった	変わらない	少し弱まった	弱まった	
不安（自分が感染）	18.9%	16.9%	21.4%	23.9%	18.9%	100.0%
不安（家族・友人が感染）	19.4%	19.4%	20.4%	25.4%	15.4%	100.0%
不安（他人に感染させる）	17.9%	17.4%	32.3%	18.4%	13.9%	100.0%
外出への後ろめたさ	15.9%	10.9%	11.9%	40.3%	20.9%	100.0%
パンデミック収束への期待	21.4%	30.8%	22.9%	11.9%	12.9%	100.0%
感染しても軽い症状という認識	6.0%	20.9%	45.8%	13.9%	13.4%	100.0%

さは弱まったという人が、明らかに多い。

調査時点での COVID-19 感染のリスクに関する意識も尋ねており、その結果は表 6 の通りである。表から分かるように、実家以外に居住する回答者の方が、対策を取ることによって感染する可能性を抑えられる、感染しても軽症で済む可能性が高い、といった認識をする傾向にある。実家以外で生活する学生は、家族と同居する人よりも、感染リスクをコントロールできる、あるいはしなければならぬと考えやすいものと思われる。実際、表 7 に示すように、実家以外に住む学生は、概して感染防止のための行動を自ら行っている傾向が見られた。

## 2.2 オンライン授業に関する意識

調査が行われた 2021 年度も、多くの授業がオンラインで行われた。本調査のデータによれば、回答者の 1 週間あたりオンライン授業コマ

数は平均 11.75 コマである。パンデミックによるオンライン授業も 2 年目を迎えた中で、学生はどのようにオンライン授業を捉えていたのだろうか。表 8 は、オンライン授業への満足度を示す。全般的に、満足度は非常に高いと言えるだろう。これは学生のインターネット利用や情報に関するリテラシーの高さにも支えられての結果であると思われるが、COVID-19 によって導入されざるを得なかったオンライン授業を、お茶の水女子大学の学生・教職員は効果的に活用してきたと考えられる。各項目への満足度を見ると、比較的満足度が低いのは「学生同士のやり取り」「担当教員とのやり取り」「ディスカッション」「授業外学習の量」「レポート・課題」などとなっており、クラスメートや教員との授業中・授業外のコミュニケーションや、課題をはじめとする授業外で課される学習の量が課題となっていると考えられる。

表 6 居住形態別 COVID-19 に関する認識

		そう思う	どちらかといえそう思う	どちらともいえない	どちらかといえそう思わない	そう思わない	計	(N)
外食をすることによる COVID-19 感染のリスクは高い	実家	27.7%	48.2%	14.2%	6.4%	3.5%	100.0%	141
	実家以外	18.3%	43.3%	15.0%	16.7%	6.7%	100.0%	60
	居住形態計	24.9%	46.8%	14.4%	9.5%	4.5%	100.0%	201
対策を取っていれば、自分が COVID-19 に感染する可能性は低い	実家	9.9%	43.3%	21.3%	19.1%	6.4%	100.0%	141
	実家以外	20.0%	50.0%	16.7%	10.0%	3.3%	100.0%	60
	居住形態計	12.9%	45.3%	19.9%	16.4%	5.5%	100.0%	201
自分が COVID-19 に感染しても、軽い症状で済む可能性が高い	実家	7.1%	31.9%	31.2%	15.6%	14.2%	100.0%	141
	実家以外	13.3%	26.7%	36.7%	18.3%	5.0%	100.0%	60
	居住形態計	9.0%	30.3%	32.8%	16.4%	11.4%	100.0%	201

表 7 学年・居住形態別 感染防止行動をとる割合

	1, 2 年生		3, 4 年生		計 (N = 201)
	実家 (N = 109)	実家以外 (N = 42)	実家 (N = 32)	実家以外 (N = 18)	
消毒液のストックを確保している	32.1%	54.8%	34.4%	22.2%	36.3%
食品や飲料の買い出しの回数を少なくしている	12.8%	26.2%	9.4%	16.7%	15.4%

表9はオンライン授業のメリット(利点)として挙げられた点、表10はデメリット(難点)として挙げられた点を学年別に示している。メリットとしては、「通学時間が節約できる」をほぼ全員が挙げている。また、「化粧などの身だしなみを気にしなくてよい」も80%近い回答者が挙げており、多くの大学生女性が化粧をして通学していたところ、その労力をオンライン授業によって削減することができたことを示している。後述の通り、化粧行動の変化については、報告書所収のレポートにおいて詳しい分析が示されている。学年による違いとしては、3,4年生がこの身だしなみや、「教室より集中できる」を挙げる傾向がある。オンライン授業のデメリットとしては、クラスメートとしてのコミュ

ニケーションの問題が最も多く挙げられている。そのほか、「目が疲れるなど、体調に悪い影響がある」「緊張感がない」「集中できない」「課題が多い」などが比較的多い。今後オンライン授業が全面的に行われる際は、精神的なものも含め、健康への影響に注意すべきと考えられる。また、オンライン授業の方が集中できるとする人もいる一方で、オンライン授業では緊張感を欠き集中できないという学生もいること、授業外学習の量への配慮が必要であることも示されているだろう。

### 2.3 インターネット利用

授業以外の場面でも、パンデミック下で学生によるインターネットの利用が大幅に増えたこ

表8 オンライン授業への満足度

	満足している	どちらかといえば満足している	どちらともいえない	どちらかといえば満足していない	満足していない		(N)
オンライン授業全般	44.7%	37.2%	7.5%	8.0%	2.5%	100.0%	199
教員の説明(講義)	42.7%	42.7%	6.5%	6.5%	1.5%	100.0%	199
教材(動画を除く)	39.8%	42.9%	11.2%	4.1%	2.0%	100.0%	196
動画教材	41.6%	35.7%	10.8%	9.2%	2.7%	100.0%	185
小テスト	33.7%	37.2%	23.8%	3.5%	1.7%	100.0%	172
ディスカッション	21.4%	34.9%	20.3%	15.6%	7.8%	100.0%	192
レポート・課題	22.6%	28.6%	27.6%	16.6%	4.5%	100.0%	199
授業外学習の量	22.1%	25.1%	24.1%	22.1%	6.5%	100.0%	199
担当教員とのやり取り	23.7%	25.3%	22.2%	20.2%	8.6%	100.0%	198
学生同士のやり取り	13.1%	12.6%	26.3%	30.3%	17.7%	100.0%	198

表9 学年別 オンライン授業のメリット(利点)

	1,2年生 (N=151)	3,4年生 (N=50)	計 (N=201)		1,2年生 (N=151)	3,4年生 (N=50)	計 (N=201)
通学時間が節約できる	99.3%	96.0%	98.5%	教室より集中できる	14.6%	30.0%	18.4%
自分のペースで学習できる	53.6%	46.0%	51.7%	教材が分かりやすい	7.3%	14.0%	9.0%
復習がしやすい	21.2%	20.0%	20.9%	教員に質問がしやすい	15.2%	16.0%	15.4%
コンピュータースキルが身に付く	25.8%	20.0%	24.4%	化粧などの身だしなみを気にしなくてよい	76.2%	86.0%	78.6%

とが示されている。学業・仕事以外でインターネットを利用する時間を聞いた質問項目では、回答者の64.2%が増加した、24.2%がやや増加したと回答している。さらに細かくインターネット利用の変化を見ると、表11に示すように、インターネット通販の利用、SNSの利用、動画サイト・動画配信サービスの利用、QRコード決済の利用などが増加している。とりわけ、動画サイト・動画配信サービスやSNSの利用は大幅に増加している。報告書所収のレポートには、SNS利用やデジタル機器利用が学生生活に与える影響を分析したものもあるが、パンデミック下ではSNSやデジタル機器利用が増

えざるを得ないことがその背景にある。

表12は、インターネット通販の利用が増えた項目を、居住形態別に調べた結果である。実家住者もそうでない人もインターネット通販をより利用するようになったが、家電製品、家具、生鮮食品以外の食料品、衣類、日用品などの項目において、実家以外に居住する学生の利用がとくに増加している。実家を離れて生活する学生にとって、インターネット通販の利用が生活のために必要になっている様子が窺える。

## 2.4 政治に関する意識

COVID-19への対策に関心が集まる中、学生

表10 学年別 オンライン授業のデメリット（難点）

	1, 2年生 (N=151)	3, 4年生 (N=50)	計 (N=201)		1, 2年生 (N=151)	3, 4年生 (N=50)	計 (N=201)
通信環境が十分でない	23.2%	24.0%	23.4%	なれないパソコン操作に苦勞する	15.9%	4.0%	12.9%
課題が多い	55.6%	36.0%	50.7%	教員に質問がしにくい	22.5%	16.0%	20.9%
クラスメートとのコミュニケーションがとりにくい	81.5%	74.0%	79.6%	授業の教材がわかりにくい	4.6%	2.0%	4.0%
オンライン授業に必要な機器を揃える必要がある	21.2%	18.0%	20.4%	オンライン授業に取り組む時間が不足しがちになる	9.9%	8.0%	9.5%
緊張感がない	55.0%	48.0%	53.2%	孤立感がある	29.8%	26.0%	28.9%
グループワークができない	22.5%	20.0%	21.9%	目が疲れるなど、体調に悪い影響がある	57.6%	58.0%	57.7%
課題や出席がきちんとできているかわからない	27.8%	16.0%	24.9%	集中できない	50.3%	50.0%	50.2%

表11 インターネット利用の変化 (N=201)

	流行前後ともしていない	増加した	やや増加した	変わらない	やや減少した	減少した
インターネット通販の利用	10.0%	39.3%	34.8%	15.9%	0.0%	0.0%
SNSの閲覧または投稿	2.5%	44.3%	36.3%	13.9%	1.5%	1.5%
動画サイト・動画配信サービスの利用	1.0%	60.2%	27.9%	10.0%	1.0%	0.0%
QRコード決済 (PayPay、d払い、楽天ペイなど) の利用	35.8%	26.4%	15.4%	20.9%	0.5%	1.0%

の政治に関する意識は高まったのだろうか。政治に関するニュースを見る時間の変化を尋ねた質問項目では、パンデミック前（2020年2月以前）と比較して増加したという回答が14.4%、やや増加31.3%、変わらない33.8%、やや減少6.5%、減少9.0%という結果が得られている。多くの学生において政治に関するニュースに接触する時間は増えている。表13および14は、学年別に見た政治に関する意識の、パンデミック前からの変化である。学年による差はそこまで大きくないが、概して、パンデミック前から大学に入学していた3、4年生の方が、政治への関心が高まり、政府への信頼感が減少したと回答する傾向があるだろう。

表15に示すように、この2つの意識の間には

関連があり、政治への関心が高まった人ほど、政府への信頼感が減少したと回答する傾向がある。

## 2.5 友人・家族との関係

COVID-19によるパンデミックは、ソーシャル・ディスタンスを要求し、友人・家族との関係にも多くの変化をもたらした。報告書所収のレポートの多くがこの点に言及しているが、ここでは基本的な変化の状況を示したい。表16から18に、家族とのコミュニケーションのパンデミック前（2020年2月以前）からの変化を示した。1,2年生で調査時点（2021年10月）では実家以外に住む学生においては、当然ながら家族との対面での会話が大幅に減少しているが、そのかわりに家族との電話や、メッセージ

表12 居住形態別 インターネット通販利用が増えた品目

	利用しない	家電製品	家具	生鮮食品	他の食料・飲料	衣類	書籍・雑誌	日用品	チケット類
実家 (N=141)	9.2%	6.4%	2.9%	0.7%	8.6%	45.0%	46.4%	25.0%	29.3%
実家以外 (N=60)	10.0%	25.0%	25.0%	0.0%	16.7%	55.0%	45.0%	30.0%	20.0%
居住形態計 (N=201)	9.5%	12.0%	9.5%	0.5%	11.0%	48.0%	46.0%	26.5%	26.5%

表13 学年別 政治に関する意識（政治への関心が高まった）

	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらともいえない	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない	計	(N)
1,2年生	12.6%	45.0%	19.2%	8.6%	14.6%	100.0%	151
3,4年生	20.0%	40.0%	14.0%	12.0%	14.0%	100.0%	50
計	14.4%	43.8%	17.9%	9.5%	14.4%	100.0%	201

表14 学年別 政治に関する意識（政府への信頼感が減少した）

	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらともいえない	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない	計	(N)
1,2年生	17.9%	25.8%	39.1%	7.9%	9.3%	100.0%	151
3,4年生	18.0%	38.0%	22.0%	14.0%	8.0%	100.0%	50
計	17.9%	28.9%	34.8%	9.5%	9.0%	100.0%	201



表 15 政治に関する意識の関連

		政府への信頼感が減少した			計	(N)
		あてはまる／どちらかといえばあてはまる	どちらともいえない	あてはまらない／どちらかといえばあてはまらない		
政治への関心が高まった	あてはまる／どちらかといえばあてはまる	59.0%	29.1%	12.0%	100.0%	117
	どちらともいえない	30.6%	58.3%	11.1%	100.0%	36
	あてはまらない／どちらかといえばあてはまらない	29.2%	31.3%	39.6%	100.0%	48
	計	46.8%	34.8%	18.4%	100.0%	201

表 16 学年・居住形態別 家族との対面での会話

		増加した	やや増加した	変わらない	やや減少した	減少した	計	(N)
1,2年生	実家	26.6%	28.4%	40.4%	2.8%	1.8%	100.0%	109
	実家以外	4.8%	9.5%	4.8%	9.5%	71.4%	100.0%	42
3,4年生	実家	37.5%	31.3%	28.1%	0.0%	3.1%	100.0%	32
	実家以外	16.7%	0.0%	55.6%	16.7%	11.1%	100.0%	18
計		22.9%	22.4%	32.3%	5.0%	17.4%	100.0%	201

表 17 学年・居住形態別 家族との電話（ビデオ通話を含む）

		増加した	やや増加した	変わらない	やや減少した	減少した	計	(N)
1,2年生	実家	4.6%	5.5%	84.4%	1.8%	3.7%	100.0%	109
	実家以外	59.5%	16.7%	9.5%	4.8%	9.5%	100.0%	42
3,4年生	実家	6.3%	6.3%	81.3%	0.0%	6.3%	100.0%	32
	実家以外	22.2%	27.8%	50.0%	0.0%	0.0%	100.0%	18
計		17.9%	10.0%	65.2%	2.0%	5.0%	100.0%	201

表 18 学年・居住形態別 家族とのメッセージのやり取り（メール、LINE など）

		増加した	やや増加した	変わらない	やや減少した	減少した	計	(N)
1,2年生	実家	3.7%	16.5%	77.1%	0.9%	1.8%	100.0%	109
	実家以外	52.4%	28.6%	14.3%	0.0%	4.8%	100.0%	42
3,4年生	実家	0.0%	15.6%	71.9%	6.3%	6.3%	100.0%	32
	実家以外	11.1%	50.0%	38.9%	0.0%	0.0%	100.0%	18
計		13.9%	21.9%	59.7%	1.5%	3.0%	100.0%	201

のやり取りが大きく増加している。それに対して、実家に居住する学生においては、家族との対面での会話が増加したという回答が多い。3、4年生で実家以外在住の回答者は少ないが、家族との電話やメッセージのやり取りが増えた傾向は見て取ることができた。家族と過ごす時間についての調査項目でも、1、2年生で実家以外居住の学生では66.7%が減少またはやや減少しているのに対し、1、2年生で実家在住の学生では増加が70.6%、3、4年生で実家在住の学生では増加が81.3%となっており、その変化がそのまま家族とのコミュニケーションの変化につながっている。

友人とのコミュニケーションの変化についてはどうか。表19から21に示す通り、友

人との対面での対話が学年や居住形態にかかわらず減少している一方で、友人との電話やメッセージのやり取りは増加している。

表22から24は、家族に関する意識のパンデミック以前（2020年2月以前）からの変化を示している。これらの意識については、表から分かるように、居住形態による違いが明確であった。実家以外で暮らす学生ほど、家族のことをより気にするようになり、家族とのつながりを維持したいと思うようになり、家族と会えなくても工夫して話したいと思うようになった。前述のように対面での会話が難しくなり、電話やメッセージによるコミュニケーションを取るようになった実家以外在住の学生は、家族との関係を重視するようになり、関係を積極的に維持

表 19 学年・居住形態別 親しい友人との対面での会話

		増加した	やや増加した	変わらない	やや減少した	減少した	計	(N)
1,2年生	実家	0.9%	5.5%	8.3%	27.5%	57.8%	100.0%	109
	実家以外	0.0%	2.4%	16.7%	19.0%	61.9%	100.0%	42
3,4年生	実家	3.1%	0.0%	6.3%	21.9%	68.8%	100.0%	32
	実家以外	0.0%	0.0%	16.7%	16.7%	66.7%	100.0%	18
計		1.0%	3.5%	10.4%	23.9%	61.2%	100.0%	201

表 20 学年・居住形態別 親しい友人との電話（ビデオ通話を含む）

		増加した	やや増加した	変わらない	やや減少した	減少した	計	(N)
1,2年生	実家	32.1%	32.1%	29.4%	0.0%	6.4%	100.0%	109
	実家以外	16.7%	26.2%	42.9%	2.4%	11.9%	100.0%	42
3,4年生	実家	18.8%	37.5%	37.5%	0.0%	6.3%	100.0%	32
	実家以外	22.2%	27.8%	38.9%	0.0%	11.1%	100.0%	18
計		25.9%	31.3%	34.3%	0.5%	8.0%	100.0%	201

表 21 学年・居住形態別 親しい友人とのメッセージのやり取り（メール、LINE など）

		増加した	やや増加した	変わらない	やや減少した	減少した	計	(N)
1,2年生	実家	20.2%	34.9%	34.9%	5.5%	4.6%	100.0%	109
	実家以外	11.9%	31.0%	33.3%	14.3%	9.5%	100.0%	42
3,4年生	実家	3.1%	34.4%	50.0%	12.5%	0.0%	100.0%	32
	実家以外	16.7%	27.8%	50.0%	0.0%	5.6%	100.0%	18
計		15.4%	33.3%	38.3%	8.0%	5.0%	100.0%	201

表 22 居住形態別 意識 (家族のことをより気にするようになった)

	あてはまる	どちらかといえ ばあてはまる	どちらとも いえない	どちらかといえ ばあてはまらない	あてはま らない	計	(N)
実家	20.6%	28.4%	31.2%	10.6%	9.2%	100.0%	141
実家以外	36.7%	30.0%	21.7%	6.7%	5.0%	100.0%	60
計	25.4%	28.9%	28.4%	9.5%	8.0%	100.0%	201

表 23 居住形態別 意識 (家族とのつながりを維持したいと思うようになった)

	あてはまる	どちらかといえ ばあてはまる	どちらとも いえない	どちらかといえ ばあてはまらない	あてはま らない	計	(N)
実家	17.0%	22.0%	37.6%	12.1%	11.3%	100.0%	141
実家以外	43.3%	21.7%	23.3%	6.7%	5.0%	100.0%	60
計	24.9%	21.9%	33.3%	10.4%	9.5%	100.0%	201

表 24 居住形態別 意識  
(家族と会えなくても方法を工夫して話したいと思うようになった)

	あてはまる	どちらかといえ ばあてはまる	どちらとも いえない	どちらかといえ ばあてはまらない	あてはま らない	計	(N)
実家	8.5%	12.1%	42.6%	15.6%	21.3%	100.0%	141
実家以外	26.7%	43.3%	16.7%	6.7%	6.7%	100.0%	60
計	13.9%	21.4%	34.8%	12.9%	16.9%	100.0%	201

したいと思うようになったと考えられる。

表 25 から 27 は、友人に関する意識の変化を示している。これらの意識の変化には、学年による違いが認められた。パンデミック後に入学した 1, 2 年生の方が、3, 4 年生と比較して、友人のことをより気にするようになり、友人とのつながりを維持したいと思うようになり、友人と会えなくても方法を工夫して話したいと思うようになったという傾向がある。1, 2 年生はパンデミックの影響とともに大学入学を経験したことによる影響を受けているため、友人関係を重視するようになる傾向がより強いのではないかと考えられる。COVID-19 の影響のみを

受けている 3, 4 年生に注目するならば、パンデミックによって友人を重視するようになった人ばかりではないとも考えられる。

## 2.6 食生活に関する意識と行動

本調査は、食生活に関する質問項目を多く含むという特徴を持ち、報告書所収のレポートのうち 2 つが COVID-19 による学生の食生活の変化を扱っている。表 28 から 31 は、学年・居住形態別に、食に関する行動のパンデミック前 (2020 年 2 月以前) からの変化をまとめている。表 28 によると、夕食を作る頻度は、実家以外に住む 1, 2 年生という居住形態が変化した学

表 25 学年別 意識（友人のことをより気にするようになった）

	あてはまる	どちらかといえ ばあてはまる	どちらとも いえない	どちらかといえ ばあてはまらない	あてはま らない	計	(N)
1,2年生	14.6%	35.1%	22.5%	12.6%	15.2%	100.0%	151
3,4年生	6.0%	16.0%	20.0%	34.0%	24.0%	100.0%	50
計	12.4%	30.3%	21.9%	17.9%	17.4%	100.0%	201

表 26 学年別 意識（友人とのつながりを維持したいと思うようになった）

	あてはまる	どちらかといえ ばあてはまる	どちらとも いえない	どちらかといえ ばあてはまらない	あてはま らない	計	(N)
1,2年生	27.2%	45.7%	11.9%	7.9%	7.3%	100.0%	151
3,4年生	12.0%	36.0%	18.0%	24.0%	10.0%	100.0%	50
計	23.4%	43.3%	13.4%	11.9%	8.0%	100.0%	201

表 27 学年別 意識（友人と会えなくても方法を工夫して話したいと思うようになった）

	あてはまる	どちらかといえ ばあてはまる	どちらとも いえない	どちらかといえ ばあてはまらない	あてはま らない	計	(N)
1,2年生	27.8%	37.1%	17.2%	9.3%	8.6%	100.0%	151
3,4年生	12.0%	40.0%	20.0%	14.0%	14.0%	100.0%	50
計	23.9%	37.8%	17.9%	10.4%	10.0%	100.0%	201

表 28 学年・居住形態別 食生活の変化（夕食を自分自身で手作りする）

		減少	変わらない	増加	計	(N)
1,2年生	実家	6.4%	75.2%	18.3%	100.0%	109
	実家以外	4.8%	11.9%	83.3%	100.0%	42
3,4年生	実家	15.6%	71.9%	12.5%	100.0%	32
	実家以外	22.2%	44.4%	33.3%	100.0%	18
計		9.0%	58.7%	32.3%	100.0%	201

生以外でも、実家に住む1,2年生と実家以外に住む3,4年生で増加したと答えた人が目立つ。パンデミックによって家に滞在する時間が長くなり、食事作りに関わる行動が変化した学

生もいることが窺える。

表 29 は朝食摂取頻度の減少、表 30 は弁当や惣菜の活用の増加、表 31 は外食の減少を示している。2020年2月から調査時点までに大学

表 29 学年・居住形態別 食生活の変化（朝食を食べる）

		減少	変わらない	増加	計	(N)
1, 2 年生	実家	21.1%	75.2%	3.7%	100.0%	109
	実家以外	35.7%	57.1%	7.1%	100.0%	42
3, 4 年生	実家	21.9%	71.9%	6.3%	100.0%	32
	実家以外	22.2%	72.2%	5.6%	100.0%	18
計		24.4%	70.6%	5.0%	100.0%	201

表 30 学年・居住形態別  
食生活の変化（弁当や惣菜，デリバリー食品を食べる）

		減少	変わらない	増加	計	(N)
1, 2 年生	実家	22.9%	50.5%	26.6%	100.0%	109
	実家以外	23.8%	23.8%	52.4%	100.0%	42
3, 4 年生	実家	15.6%	50.0%	34.4%	100.0%	32
	実家以外	11.1%	50.0%	38.9%	100.0%	18
計		20.9%	44.8%	34.3%	100.0%	201

表 31 学年・居住形態別 食生活の変化（外食をする）

		減少	変わらない	増加	計	(N)
1, 2 年生	実家	13.8%	63.3%	22.9%	100.0%	109
	実家以外	26.2%	47.6%	26.2%	100.0%	42
3, 4 年生	実家	50.0%	37.5%	12.5%	100.0%	32
	実家以外	38.9%	27.8%	33.3%	100.0%	18
計		24.4%	52.7%	22.9%	100.0%	201

入学を経験していない3, 4年生においても朝食摂取が減少しており、パンデミックの食生活への影響が示唆されている。弁当や惣菜の利用も全般的に増えているが、これは外食の減少に対応しているとも考えられるだろう。

表 32 は食生活に関する意識のパンデミック前からの変化を示している。デリバリーや惣菜を許容する意識は、1, 2年生で実家以外に住む学生という、この間に居住形態の変化を経験したであろう学生の間でのみ強まっている。表 30 に示されている通り惣菜やデリバリーの利

用は全般的に多くなっているが、それを良いものとするようになったかどうかについては、個人間の差が大きいようだ。

表 33 は、関連して、居住形態の選好の変化を尋ねた質問項目の結果である。全般的に、「1人暮らしの方が良いと思うようになった」という人は少数派であり、実家に在住している人においては特にそのように考える人が少ない。ただ、少数ではあっても「1人暮らしの方が良いと思うようになった」と回答する人も、とくに実際に実家以外に住んでいる学生の中には見ら

**表 32 学年・居住形態別 意識変化**  
(手作りの料理ではなく、デリバリーや惣菜でも良いと思うようになった)

		あてはまる	どちらかといえはあてはまる	どちらともいえない	どちらかといえはあてはまらない	あてはまらない	計	(N)
1,2年生	実家	7.3%	29.4%	25.7%	12.8%	24.8%	100.0%	109
	実家以外	33.3%	16.7%	11.9%	21.4%	16.7%	100.0%	42
3,4年生	実家	15.6%	12.5%	34.4%	15.6%	21.9%	100.0%	32
	実家以外	11.1%	33.3%	16.7%	16.7%	22.2%	100.0%	18
計		14.4%	24.4%	23.4%	15.4%	22.4%	100.0%	201

**表 33 学年・居住形態別 意識変化**  
(実家暮らしより1人暮らしの方が良いと思うようになった)

		あてはまる	どちらかといえはあてはまる	どちらともいえない	どちらかといえはあてはまらない	あてはまらない	計	(N)
1,2年生	実家	7.3%	25.7%	22.9%	15.6%	28.4%	100.0%	109
	実家以外	16.7%	11.9%	19.0%	23.8%	28.6%	100.0%	42
3,4年生	実家	12.5%	18.8%	18.8%	12.5%	37.5%	100.0%	32
	実家以外	16.7%	16.7%	33.3%	5.6%	27.8%	100.0%	18
計		10.9%	20.9%	22.4%	15.9%	29.9%	100.0%	201

れ、パンデミックのこの意識に対する影響にはばらつきがあることが分かる。

## 2.7 全般的な生活に関する意識の変化

最後に、生活全般に関わる意識の変化として、パンデミック前と比較したストレスの変化(表34)と、満足度の変化(表35)を扱う。各項目のストレスは、全般的には増加傾向にあると言えることができる(表34)。とくに増加した、あるいはやや増加したという回答が多いものは、「健康状態」と「学業・学修」、「友人との関係」、そして「全体的なストレス」である。COVID-19によるパンデミックによって健康状態についての懸念が大きくなったことは当然だろうが、人との接触が制限されることによって、学業や友人関係に関するストレスが増加したことも、多くの学生が感じているようだ。変わら

ないという答えが最も多いものの、「消費生活(買い物)」や「家族との関係」についてのストレスが増加したという回答も多い。他方で、少数派ではあるが、「学業・学修」や「友人との関係」、「全体的なストレス」に関しては減少したという回答もあり、先に確認したようなオンライン授業のメリットや、友人とのコミュニケーションの変化を肯定的に捉えている学生もいる可能性がある。

表35によれば、パンデミック前後の各項目の満足度変化は、全般的な傾向としては低くなった、あるいはやや低くなったという回答が多いと言えるだろうが、項目による違いもあり、また各項目に対する回答にもばらつきがある。「レジャー・余暇活動」、「友人との関係」「学業・学修」、「健康状態」、そして「生活全般」については低下したという回答が多い。ただ、「レ

表 34 ストレスの変化 (N = 201)

	増加した	やや増加した	変わらない	やや減少した	減少した	計
家計の状況	11.4%	13.9%	72.6%	1.5%	0.5%	100.0%
消費生活 (買い物)	12.4%	25.4%	57.2%	2.5%	2.5%	100.0%
健康状態	20.9%	32.3%	39.8%	5.5%	1.5%	100.0%
学業・学修	24.4%	31.3%	29.9%	11.4%	3.0%	100.0%
友人との関係	16.9%	29.9%	39.8%	9.0%	4.5%	100.0%
家族との関係	10.0%	20.9%	62.7%	4.0%	2.5%	100.0%
全体的なストレス	22.4%	38.3%	28.4%	9.5%	1.5%	100.0%

表 35 満足度の変化 (N = 201)

	高くなった	やや高くなった	変わらない	やや低くなった	低くなった	計
レジャー・余暇活動	10.9%	16.4%	18.9%	33.8%	19.9%	100.0%
友人との関係	4.5%	14.4%	32.8%	35.8%	12.4%	100.0%
家族との関係	6.5%	25.9%	52.7%	10.4%	4.5%	100.0%
健康状態	7.5%	8.0%	49.3%	28.4%	7.0%	100.0%
学業・学習	6.5%	16.9%	36.3%	30.8%	9.5%	100.0%
消費活動 (買い物)	6.5%	22.9%	47.3%	17.4%	6.0%	100.0%
生活全般	7.0%	14.4%	44.3%	28.9%	5.5%	100.0%

ジャー・余暇活動」や「学業・学修」については上昇したという回答もある程度見られる。「家族との関係」は高くなったとする人が多く、「消費生活 (買い物)」は高くなった人と低くなった人の割合が同程度である。COVID-19 は学生の満足度を全体としては低下させたと言えるだろうが、項目によってその影響は異なり、またその影響が二極化している側面もあるかもしれない。

### 3. 分析されたテーマ

最後に、「生活社会調査実習」受講生の分析テーマを簡単に紹介する。詳細については、本調査の報告書 (脇田編 2022) を参照されたい。

パンデミックとの関わりについて、「学生のリスク認知要因、所属、生活様式と感染リスクを伴う行動頻度の関連」 (黒木和) は、感染リ

スクの認知やパンデミックに関する不安がリスク行動を抑制することを示唆する一方で、リスクを認知していてもアルバイト等のためにリスク行動を取らざるを得ない状況にある学生がいることも示している。「パンデミック下の学生のニュース受容」 (秋本彩名) は、パンデミック下での生活も 2 年目を迎え、パンデミックに対する不安感や関心にばらつきが見られる中、それらがニュース源やニュースとの接触頻度と関連しているという分析結果を示している。

インターネット利用の変化に関しては、「コロナ下においてデジタル機器が大学生のストレスに与える影響」 (鷺津明也) が、パンデミック下で学生もまたデジタル機器の利用を増やざるを得ない中、デジタル機器への依存がデジタルストレスと関連していることを明らかにした。「パンデミック下での SNS (Twitter, Instagram, Facebook, Slack) の利用頻度が及ぼす学生生活

への影響」(落田瑞生)は、SNSの種類によってその利用と学生生活との関連が異なること、たとえばTwitter利用頻度は情報入手や学業成績と負の関連を示すがInstagram利用頻度は友人関係変数との間に正の相関を示すといったことを示している。

友人関係について、「パンデミックの人とのコミュニケーションに対する意識への影響」(石黒桃子)は、友人との対面での交流機会が減少した学生が対面でのコミュニケーションを希望する傾向を示した。「パンデミック禍における友人との交流頻度による学生への影響」(望月の子)は、友人関係に関する変数、とりわけ大学入学以降にできた友人との対面での交流頻度が、大学生生活の楽しさや生活の質の変化と関連していることを示している。

食生活について、「パンデミックによる食生活の変化と性別役割分業意識」(森多恵)は、パンデミックによる外食の減少、惣菜利用の増加などの食生活の変化が、大学生女性の結婚や家事分担に関する意識と関連している可能性を示唆した。「パンデミック下における女子大学生の食生活の実態と変化、およびその要因」(植木七海)は、アルバイトの状況など個々の学生の状況によって、パンデミック下の食生活に差が出てきていることを示した。

生活全般について、「パンデミック下における大学生の生活満足度」(木村彩香)は友人関係、家族関係、学業の状況、サークル所属、健康への満足度などの、生活全般に対する満足度への効果を詳細に検討している。「パンデミック下における大学生のストレスとコーピング」(細川真由)は、パンデミック下でどのようなストレスが学生のメンタルヘルスの悪化につながり、そしてどのようなストレスへの対処がその悪化を押しとどめるのかについて分析している。

その他の学生生活について、「パンデミックのアルバイトへの影響」(金子繭実)は、学生のような意識と状況が、アルバイトの条件として感染対策を重視することと関連することを示し、学生がパンデミックの影響を受けてアルバ

イトを行っていることを示唆している。「パンデミックに伴う女子大生の化粧行動の変化とそれがもたらす影響」(前田清香)は、化粧の対他的効果(他人に良い印象を与えるなど対人関係における効果)と対自的効果(自信や満足度の上昇など、自分自身の気持ちに対する効果)に着目して分析を行い、対面授業時の利用化粧品数には対他的効果と対自的効果がともに関連しているが、オンライン授業時の利用化粧品数には対自的効果のみが関連していることなどを示した。パンデミックによる対面の機会の減少が、自明視されてきた化粧行動を見直す契機となった可能性が示されている。

このように、受講生の研究により、「パンデミック2年目」である2021年度の学生の意識と行動が、多面的に描き出されたと言えるだろう。

## 謝辞

「パンデミック下の学生の意識と行動調査2021」は、国立大学法人お茶の水女子大学人文社会科学研究の倫理審査委員会に対し倫理審査を申請し、承認を得た調査・研究である。

本調査に関わった、報告書にレポートを執筆した受講生(氏名は3節参照)をはじめとする2021年度「生活調査法」「生活社会調査実習」の受講生、「生活社会調査実習」ティーチング・アシスタントの須永真帆氏に感謝したい。また、回答者をはじめとする本調査に協力いただいたすべての方に、あらためて感謝したい。

## 参考文献

脇田彩編、2022、『パンデミック下の学生の意識と行動2021』2021年度「生活調査法」「生活社会調査実習」調査報告書。



Survey on Student Life During the COVID-19 Pandemic: Students' Consciousness and Behaviors at Ochanomizu University 2021

Aya Wakita

Summary

This research report outlines the Survey on Students' Consciousness and Behaviors During the Pandemic 2021, which was conducted in October 2021; shows the results of the survey in terms of the impacts of the COVID-19 pandemic on the students' lives; and introduces reports written by the students who conducted the survey in a class called Practice on Social Research.

The results of the survey describe how the COVID-19 pandemic affects students at Ochanomizu University. Consciousness and behaviors regarding COVID-19 vary considerably among students and are related to certain attributes like living arrangement. The respondents are, on average, highly satisfied with the online lectures offered by the university though some disadvantages are noted, such as communication problems between classmates and between students and teachers, the number of assignments, and health issues. During the pandemic, students increased their Internet usage even outside of class and their viewing of political news. Communications with family and friends and dietary habits have also changed substantially. For example, the students who live away from their families place more importance on the relationship with their families than before. The levels of satisfaction with some aspects of students' lives tended to decline during the pandemic while the changes differ among aspects and vary among students. This suggests that the effects of the pandemic can be polarized among students.